

目次

| | | |
|-----------|------|---|
| 眞實になりたい | 尅 | 子 |
| 地を踏める釋迦 | 土屋觀道 | |
| 法然上人日頃の御詞 | 土屋觀道 | |
| 私の懷疑 (二) | 山口常照 | |
| 懷疑に答ふ | 土屋觀道 | |
| 吾朋便り | | |

眞實にいたる

□私は故郷へ歸て其晩友の墓へ詣りに行きました。山の上の林の中、薄が茫々と繁てゐます、其中に無數の白い石碑が立てゐました、皆生きてゐる人の様に思はれて、私は大變なつかしく感じました、が側へ寄ってみると一人と物を言はぬ、矢張り氣の毒に思へて來ました。中にはウント金を儲けた大盡さんもあります、中には美しかつた娘さんもあります、而し今は斯うして石標になつて茲で立てゐるのです。

□大きな人生の代價が石碑一本です、それを思ふと、小慾にかじりついてこそ、するともいらぬと思ひます、又一生懸命になつて自分を世間へ賣り出そうとすることも要らぬ澤山の物を儲け込んで積み上げやうともいらぬ、がた、一つ「本當の人間」になりたい。

□本當の人間になつて生きてゆきたい、假令一分間でも一秒時間でもいい、本當に「尊い自己」になつてみたい、これだけが私の唯一の願ひです。それはいつも自分が「眞實」になつて居らぬから一層そう願はれるのでせう、全く私はいつも自分を偽てゐます、自分の全分を發揮して居りません、恥かしいことだが、申譯ありません。

□人に對して自分を偽るより、自分へ對しても自分が怠けやうとしてゐます、何といふ賤しいことせう、どうかして此の根性を抜きたいものだと努めてゐますが、どうしても直らぬ、本當にズルイ根性偽り根性の根深いことを必々と感じます。

□而し今はその淺間しさを愚痴てゐることも止めて、出來ぬ中からまた、一途に眞實になりたいとつとめてゐます、何といふ矛盾でせう、而し此矛盾をやめることが出來ませぬ、恐らく私の一生は此努力で終ることとせう、けれども私には此儘終つてもこの方が幸福のやうに思はれてなりません。(尅子)

▽人間にはジとして居れぬ或る力が籠てゐます、たゞに人間斗りぢやありません、生物にも無生物にも、有機物にも無機物にも、或は電子、エーテルなど、假想せられる根本的要素にまで、悉く外界からの刺戟、變化に反應する力を持つてゐます、他に應ずる力とは換言せば潜在的の内包力であつて、これを盲目的と云はうと有目的と云はうと、一の活動性、發展性である事は否めません、聽ては進化性向上性とも見られるものであつて、この究竟性、本性性を「生命」と名付けることは出來ないものでせうか、少くとも宗教的に云てゐる「生命」とは此の根本性、第一元氣をも含んでゐるものと思ひます。

▽此意味に於て生命体ならぬものはなく、生命の現れならぬものはありません、そして何等かの力を孕んで活動して居らぬものはありません、即ち死んでゐるものは一つもなく皆生きてゐるのです。私は化學的にも物理學的にも此結論に達するだらうと信じてゐます、そして哲學や藝術や宗教はこれを直觀的に驗證し、其生命自体として完全なる顯現者たらんとする働きであります。

▽生命の世界には佛が見、佛が佛から聞く微妙極樂の海味があります、煩悶も菩提も或る價值標準からの簡別差等に過ぎなくて醒め來れば其儘既に悉くこれ如來大悲のみ心を全分戴いてゐたのでした、これを惟ふても、深く本願力に隨順して刹那刻々に更生するところ、眞に生命の輝きがあるものと思ひます。(尅)

地を踏める釋迦

(佛を見る者 三)

土 屋 觀 道

二

一、

五十前後の出家が二十前後にもならうかと思へる青年の佛弟子と何か對話してゐる。其の題はたゞ「説法の釋迦」であります。場所はごく静かな巖窟の入口、而も佛陀は窟外に向つて向ふむきに腰かけ、弟子は窟内に向つて、こちら向きに斜めに座はり一心に其の説法を聞いてゐる所であります。而も其の聞きかたがたゞ説法を聞くのではなく、いかにも眞理にふれて行く説法の聽聞であります。これに對する釋尊の態度はいかにもくつろいだ隔てのない親しさで而も嚴として犯し難い眞劍な佛陀としての尊さが保たれ乍ら、少しく上より下むきにかゝみ、弟子に向つてよりそつて、何かの説法であります。而もそれが説法といへば説法であるが、決して普通見る説法でなく、之こそ本當の釋尊の生活であるかと思はせる、人としての釋尊、慈父としての佛陀、師として弟子に教ゆる釋尊の姿であります。説法と云ふ丈けではあきたらぬ、釋迦の日常としか思はれぬ、釋尊その人の御姿であつたのであります。

窟内は薄暗く、窟外は遠く大空につゞいて宏く、時刻は朝の早々か、それとも夕暮れの日没か、外は内から窟外が見てゐるだけで、窟の入口のところにもさもなく無雜作に腰かけての對話であります。然しそれがいかにも僧團の生活として當時をしのぶには最もふさわしい感じでありました。

二、

私は此の佛畫を忘れ、靜かに其の中に釋尊の當時を偲び佛陀の僧團を如實に見るの感じを覚え、初めて人としての釋尊を深く見る事ができたのであります。いはゆる弊衣にまどはれた佛陀、そして又多くの佛弟子と同じ姿の釋迦、素足のま、で地を踏む釋尊、それは決して日本などで佛壇に安置してあるやうな、蓮臺の佛でなく、又、遙かこなたから手を合せて頭をさげて、をがんで見る釋尊でなく、又、大空に光明を放つて雲の中から説法せられてゐるやうな、雲中説法の佛でもない。千二百五十人と俱なりきと云ふ、万二千人と俱なりきと云ふやうな諸佛諸菩薩にとりまかれた佛でもなく全く地を踏める人としての釋迦その人の生活でありました。乍然さうした人としての釋尊の生活が寧ろ私には此の上もないところの佛陀の尊さを感じるものであります。それは人として釋尊がそのま、現はれて、而も眞人としての眞の佛陀の生活が私共に示されてあるからであります。否、むしろそこにこそ若し莊嚴と云ふならば眞に飾りなき佛陀の光とも云ふべきものがあるからであります。

天も地もたゞこのみ佛の人格には、その光を失い、むしろ此の一人の佛陀を莊嚴する爲めにのみ存するかに見ゆるのであります。而も其の莊嚴が單なる人間の莊嚴でない、そしてまたそれが大空にのみ仰ぐ佛でもなく又遙に佛壇に安置して拜むところの佛でもなく、人として人は、正にかくの如く生くべきである、私共の師父の佛陀としての生活を現に生活の上を示されてあるのであります。そして、また其の釋尊の弊衣の姿、素足のま、で佛弟子に對した氣分、それが日夜に席を同じうして起居を共にし、同じく窟に月日を送る釋尊の生活として、さもあるべきこと、首肯せられるものであります。千二百人と俱ならず万二千人と一緒ではないが、反つてそこにたゞ一人の、それも自分と全く其の生活を同じくした我弟子に對座した、其の對座が而もまた巖窟の入口に腰かけ弟子に道を説くその釋尊の態

三

度こそ、いかにも釋尊の實際を示すものでありました。

三。

かくてこそ私は此の佛畫を見て、初めて私の日頃念じてゐた眞の釋尊が人類の師表として此の土に出現せられたの感ずることができました。私の心には万二千人の弟子と俱ならずとも、又千二百人と一緒ならずとも、たゞ此の一人の世尊の温かき人間としての説法こそ優にそれらの几てに超えて、尊き釋尊の人格を見るのであります。

諸佛が何だ諸菩薩が何だ、今までの多くの佛はともすれば、ぎやうくしい大名式の諸佛諸菩薩に過ぎない感がある。私はかうした大名式の佛は何となく嫌いである。そしてまた、それらは私共のやうな人間の生活にはとてもできない生活であり、又とても望めない生活であり、ブルジョア氣分の佛であつて、本當の私共を救ふてくれる佛ではなかつた。それは神話のやうな世界であつた。否、少くとも自ら貧苦を體驗し疎食弊衣の生活味を知らない佛壇の佛に見えて仕方がなかつた。従つてそれらの佛はあまり人類の理想でもなく、少くとも地を踏める人としての人間の世界にはあつてもなくてもよいやうな佛であつた。否、むしろない方が人間の生活に合理的な世界であつた。雲中の佛が何だ、地を踏むこともできない佛、それが如何に私共の生活に同情したとて何になる、そんな佛は私たちの行くことのできない佛若し行くとしたら、それは死んでからの佛だ。肉体のなくなつてからの佛だ。決して此の世に於ける現實の佛ではない。人としての行かるべき生活ではない。否、一步譲つて、それが現實の佛であり、肉身のまゝに行かれる佛としたところで、それが何だ。今日の人の貧苦も知らず、生活に苦しむ、多くの人々を捨て、雲の上から眺めてゐる、佛ともあらうものが、そんなところに自分一人で楽しんで居られるか。それはまたあまりに貧欲な我がまゝな無慈悲な佛であり、非社會的の佛ではないか。然らば、よし

そんな佛が今時私共にあるとしても、それが何だ。そんな佛が何の佛だ。そこには少くとも已に佛の價うちはない。否、それは已に佛とする價値なき佛、道徳的にはむしろ罪深い佛である。だから私共にはそんな佛は佛でない。否、それはたゞ信仰うすきもの、價値なきもの、道徳的良心のない、非社會的利己主義者の勝手に造つた、自己満足の夢想に過ぎぬ佛である。と、人としての人間生活の中に眞に佛を見やうとした私の心にはさうした一面があつたのでした。

然るに今、私は此の説法の釋迦を見て、初めて人間の釋迦を見た、否、こゝに初めて眞に拜むに足るべき佛としての人を見たのであります。

地を踏める釋迦それは即ち私共の釋尊である。佛壇に一段高くに祭つた木像のやうな釋尊でなくして人に「もの」言ふ人としての釋尊の生活の中に眞に佛陀としての釋尊を見たのであります。宇宙の本源に座を占め給ふ佛も大切であります。乍然それにもまして、宇宙の本源より一步を踏み出して、此の土に出現して來られた佛こそ更に一層の尊さでありました。言換れば人としての佛陀は人類の理想を示し、人としての生活を、佛としての生活、神としての生活にまで向上せしむるものである。従て此の釋尊こそは眞の神であり、佛であり、一切の生命の救いの中心であり、根本であつたのであります。天も地も光りを覆い、日月も輝きを失つて、佛のみ眞人として輝くのであります。而もその佛が今までのやうな大名式の佛でなくして、地を踏める平民の釋迦、全人類の理想として、宇宙生命の現はれとして、人の上に佛そのものは表はしてゐるのであります。而も地を踏めるなつかしき慈父の師僧としての佛でありました。實に覺者とはかゝる人をこそ云ふべきであります。神と云い佛と云ふならば、かゝる人をこそ神と云い佛と云はねばならぬ。何故かなれば此の人の外に神を思い佛を思ふことができぬからであります。即ち一佛一切佛、一切佛一佛と云ふことをかつて聞いたことがあります、此の佛の外に

どこに一切の佛があらう、一切の佛と云ふのは即ち此の佛の多方面的現はれに過ぎぬ佛である。

五、

私がかつて、佛とは宇宙の大生命である、宇宙の太靈であると申したことがあります。否今も亦同じく斯く云ふことがあります。乍然同じ宇宙の生命と云い、宇宙の太靈と云ふ中からも、如何なる意味と内容を持つた宇宙の生命であり、内容であるべきかは、私共にとつて實に重大な問題であります。而もたゞ單に宇宙の生命といひ、太靈と申しただけで、未だ生命そのもの太靈そのもの、眞の心を知らないでは、眞の佛は判かるものではありません。尤も宇宙と云ふ言葉を通じて、時間空間に於ける物理的宇宙や、天文学的宇宙を連想して、如來の本源を無限の時と所に於ける宏大無邊の物質世界の根底に憶想することはできません。從て宇宙の生命と云い、太靈と云ふところに幾分か万有の本源として一切の根源としての佛陀が多々の場合現はれて來ることはありますが、未だ人としての理想の上に、此の宇宙生命を如實に現はす眞の佛陀はそれだけでは現はれて來ないのであります。

乍然、靜かに佛としての釋尊を考へ來る時、私共の心の上に忽然として現はれて來るものは即ち佛として生ける釋迦その人を眞に佛として見、又之に接した當時の佛弟子には佛が單なる宇宙生命や宇宙太靈位ではないのであります。そこをつかんで表したのがこのタゴールの佛畫であります。即ち人としての佛を眞に此の地上に現はし私共の前に捕へて來たのであります。而もその釋迦は單なる人としての釋迦でもなく、また單なる雲中の佛でもなく、どこまでも宇宙生命と一つになつた、宇宙生命の体現者として、私共の師表となり、私共の踏み渡るべき神の生活を民衆の上に示された佛であつたのであります。而もいかに其の釋尊が師として其の弟子に接していられたか、それがまた、たまたまなく私共の心をさぐるのであります。昔から「三尺隔て、師の影を踏まず」と云ふ諺はあるが、未だ師が弟子に對する道

を説いたものはないやうです。然るに今私はこのことを正しく此の釋尊の上に於て見る感じがします。そのまじめな釋尊の態度いかにも眞剣なその面もち、而して打ちとけた無雜作の中に、弟子を思ふ釋尊のあた、かさが、何とも云へぬ姿であります。而も其の間、實に佛は單なる世間の佛ではない、永劫に輝く佛陀の自覺が生きて佛陀の姿として限りなく輝いて見るのであります。天にも地にもまたとなひ、唯一人の佛陀であります。而も其の説く眞理は私共の生命かに見ゆる。而して之を説く佛陀は何にも代へ難いなつかしき慈父である。

六、

近時の人は「佛が見える」とか「佛など見えるものか」とかさわいてゐる。又仲にはよほど熱心な人々でさへ、佛を見るだけにさへ全身をこめて求めてゐる人がある。然るに今この釋尊を見る時、之等の人の云ふ佛とは一体何を云ふのであらうか、佛と云ふ佛が若し釋尊の如き佛を意味するならば佛を見ると云ふことは常に佛を見るばかりでなく、已に佛にあつて佛を見、佛の説法をさへ現に聽聞してゐることを知る可きであらう。釋尊を以て單なる佛として見る丈けでは眞の佛を見るものではない、眞に佛を見るものは其の佛に接して佛の説法をこそ聽く可きである。

弊衣の釋迦、一比丘としての地を踏める釋尊は正しく此の意味を示してゐる。そしてその体現者としての佛陀は太空に輝く雲中の佛でなくして、一切の人の中に地を踏める人間としての釋迦である。而もそれこそは正に私共の理想であり生活であるべき佛陀の慈光でありました。

七、

何と云ふなつかしき世尊の姿よ、私は吾れ知らずさう感せずにはゐられませんでした。此のなつかしい世尊の御姿！涙ぐましいほど嬉しく、したわしく、涙せずにはゐられません。(二、九、二一)

法然上人日頃の御詞

(勅修御傳第二十一現代意譯)

(二)

土 屋 觀 道

八

○ 又いはく。念佛申すには全く何の仔細もない。たゞ申しさへすれば極樂へ生れると知つて、心をこめて申せばまゐるのである。

○ 又いはく。南無阿彌陀佛といふことは特別な事に思つてはならない。阿彌陀佛よ、我をたすけ給へといふことばと心得て、心には阿彌陀佛よ、たすけ給へとおもひ、口には南無阿彌陀佛と唱ふるを、三心具足の念佛と申すのである。

○ 又いはく。罪はいかなる罪深き者でもなほ生れると信じて、小罪をも犯すまいと思ふべきである。罪人でもさへ往生ができるのだから、どうして善人が往生せぬことがありませう。念佛の行はたとへ一聲でも十聲でもなほむしくないと信じて、間

佛を唱へて、聲について決定往生の思いをなすべきである。

○ 又いはく。たゞ世間のことをやり乍らも、念佛を申々これをするのおもいをせよ。他のことをし乍ら、念佛するのだとは思つてはいけない。

○ 又いはく。往生をわがひ、極樂にまゐりたいことを、まじめにおもいこんだ人の氣色は、世の中をひどくねり、恨んだ氣色でふだんはあるのである。

○ 又いはく。人の命は食事の時、むせて死ぬることもあるのだから、南無阿彌陀佛とかんで、南無阿彌陀佛とのみ入るべきである。

○ 又いはく。法爾の道理といふことがある。ほのほは空にのぼり、水はくだりさまになされる。菓子の中に、すゆいものもあり、あまいものもある。これは皆法爾の道理である。阿彌陀佛の本願は、

断なく修すべきである。一念でさへ往生ができるもの、まして多念をやだ。

○ 又いはく。一念十念で往生ができるからと云つて、念佛を疎忽に申すのは、信が行をさまたぐるのである。又念々に捨てない者といふからとて、一念をふたしかだとおもうのは、行が信をさまたぐるのである。信をば一念に生ると信じ、行をば一形(一生)にはげむべきである。

○ 又一念をばどうかと思ふのは念々の念佛がみな不信(疑い)の念佛になる。其の故は、阿彌陀佛は一念に一度の往生をあておきたまうた願だから一念ごとに往生の業となるのである。

○ 又いはく。煩悶のうすきあつきをも顧みず、罪障の軽き重きをもさたせず、たゞ口に南無阿彌陀

名號をもつて罪惡の人々をみちびきたいとお誓いになつたのだから、たゞ、一向に念佛さへ申せば佛の來迎は法爾の道理で疑いが無い。

○ 又いはく。善導の釋を拜見するに、源空の目には三心も南無阿彌陀佛、五念も南無阿彌陀佛、四修も南無阿彌陀佛である。

○ 又いはく。弘願と云ふのは、「大無量壽經に説くやうに、一切善惡の凡夫人、生を得た者は皆阿彌陀佛の大願業力に乗じ、増上縁と爲らないものはない」と善導大師が釋していられる。私のやうな愚か者はひとへにたゞこの弘願をたのむのだ。

○ 又いはく。吾は烏帽子もきない男である。この十惡の法然房、愚痴の法然房が、念佛して往生しやうと云ふのである。

○ 又いはく。學生骨(學問ばかりして)になつて念佛を失はせぬかね。

私の懷疑

山口 常照

(二)

山口氏の懷疑に答ふ(二)

土屋 觀道

中外日報發行の西田天香氏の〇を讀んで深く感じた事があります。それは近代文化の批判として、マラソン競争と盆踊、及四國通路の話であります。天香さんは言ふ、「自分はマラソン競争の様なものではない、むしろ盆踊の方を探る、〇い處を廻る事には變りがないがマラソンは地獄の様で、盆踊は極樂の氣持がする。第一マラソンは皆の人が勝利者にならないが、盆踊は誰一人敗れるものが出来ないからよい。殺氣立つマラソンと平和の溢れる盆踊とは正直なところ比較にならない。一体何故に其様に走らねばならんかと自分には解らん」

「一つの見方ではマラソン程速いものはない。そうして盆踊は反對に極度に速いとも見られるのである。こんな事を言ふた時に二人は直につかつかつて来た、

「なぜマラソンがそんなに速いのか」

「マラソンは何時にも目的に達して居ないではないか……目的を達した事がなければ遅いとも言へる」

「では盆踊は何故速いのか？」

「踊り子は皆満足して居る、早く勝ちたいといふ目的があれば遅からうが、目的が楽しく地軸に突立つ事なら最後の勝利になつて居る。速いとも言へるではないか」

「盆踊は一足一足に安住して居るのが面白い、いつでも同じ處と心得て無心に踊つて楽しんで居る。息疲れもなく、眼もむかす、勿論人を凌ぎもせず、地球の方が大速力で走つて居てくれる上を靜かにわたつて安住して居る。更にその安住は心の内外にわたる。若し手足の動きが無相の節に當るなら脱落心身の妙用で三十三天を駆けめぐつてくるといふ事にもなる何と速いものではないか」

更に天香さんは、面白い四國通路の話をして結論に、

「私が四國をまはる内に時々會ふた文化通路？があつた。それは「早くまはる」事を目的として居るのである。新らしいレコードを作る爲と迄は行かなくとも兎に角早い事を自慢にする連中である。一人の青年が自轉車で廻つて居た。たしか十日位ですませたさかひで、嬉しがつて居た。これではどこまはつたのか通路の姿、通路の心、一足一足を南無大師遍照金剛三昧とする時に九品の淨土を白象に跨つてめぐる普賢菩薩とひさしいのであるものを、鳥打帽子にジャケツにゲートルで軍歌やはやり歌を口ずさみ乍ら自轉車で廻るなら、たさひ極度のスピードさかで走らせさせて、何になる御苦勞様な事である。心のなやみ身の病氣、さては生活のなやみの整理に何のたしにもならぬ」

一步一步を味はふてこそ、そこに淨土はあらはれ、父母所生身即証大覺位まで行かずとも一足一足に解脱の光はまして来る。急がなかつともよい。踵を返す處に究竟はあつた。三百何十里の何處に立つても大師にはあへる。目的を外にもてばたさひ日に何廻るか駆けまはつても少しも四國を通路して居らぬ。自轉車の青年は今のマラソン文化にかぶれたのである。此の青年は大方ほんとうに拜む通路さんを尻目にかけて、笑つて走つた事であらうが、おなじなやみの世界にうろくして一步も進歩して居ない、素走しておせい走方ではあるまいか？」と。(三)

事實のところ終局に於て諸佛と等しき覺位を得るといふ事で現在の生活が心から満足されるでありませうか？ 生々として生きて行けるでせうか。或はそれは心細い一種のあきらめではないでせうか。夢の様な幻の様な頼りない望みではありませうか。終局に於ける成佛の考は、マラソンのではないでせうか、或は文化通路式ではないでせうか、マラソン競争では決勝点をしめ得て初

(二三)天香さんのマラソン競争と四國通路の御話は私も嘗て〇の上で見たことがありますが、之を念佛生活の上に主張せらるゝ、貴師の達見には一層面白いものがあると思ひます

(二四)夫はさにかく「攝化せられし人は皆」云ふことをわざと「攝化せられし終局には」して訂正されたこと云ふことは、特に人は皆が終局にはなつたところに普通の問題が特種の問題に限程せられた感じがして、いやな感じがせられます。即ち攝化せられたものは皆やいふところに入信者としての自分の喜びが、いやそうでないぞ、終局に於てだぞと殊更に阻止されたやうな氣がして、従前からの禮拜儀を知つていれば知つてゐるほどなるとなく押つけられるやうな氣がします。攝化せられた終局と云ふのはいつのことやら、結局聖道自力の成佛難の感がこゝでもそれないのを遺憾に思はれます。初め上人が「終局には」させられてあつたのを、其後永く「人は皆」普遍的に改訂せられていたのを、晩年、殊にそれを滅后に至つてもこの古い型に

歸られたのは全くいやな氣がします。

(一五)この点全く貴師と同感です。

(一六)入信のときが即ち佛子となつたときである。乍然之は梵網經に示すところであつて、上人も亦常に説かれた所です。然しそれが直に攝化せられし終局ではない、攝化せられた終局に成佛する云ふことはさきより攝化される云ふ攝化の方に力をこめて見るべきでないか、若しさうでなくして、終局と云ふ方に重きをおくならば吾々凡夫の攝化の終局などはさても考へも及ばぬほど遠遠のことなる。それに衆生佛成を受ければ諸佛の位に入るその梵網經の御言葉はこのさき如何に解してよいものやら、之を攝化の終局さのみ考へるのは此の經典の意味でなく、又故上人の本意でもなかつた。而も諸佛の位に入るこそがそのまゝ、諸佛の子となることで、鶏の卵が孵かして雛鳥となつたところが、已に鶏の仲間に入るのと同様に、佛子の位に入つたことが直に諸佛と等しき覺位に入ると云つたことでは決して誤りでない。若し誤りでないとするならば攝化せられし終局にはさするよりも人は皆さした方が遙かに文意にも

て一步一步走つた事の價值を生ずる。中途でやめた人等に入らない人は全く無價值となる。成佛を終局に見る人、妙覺に達した菩薩は五十一位が價值を生ずるけれども、例へば十行位で死んだとすれば、全く無意義になつてしまふ。終局の成佛論はカラ廻りの文化遍路となる、佛道修行は決してそんなものではあるまい。(四)

絶対無限の光明に攝化せられし終局に、諸佛と等しき覺位を得ると言ふのと、攝化せられし人は皆、攝化せられし當體(一刹那)より諸佛と等しき覺位を得るといふのとは、天香さんのマラソン競争と盆踊の比較によくあてはまる。終局に諸佛と等しき覺位を得るとはマラソン競争の側に屬する様に思へる、之に反して「攝化せられし人は皆、諸佛と等しき覺位を得」とは盆踊の側に屬する。(五) 勿論天香さんの様にマラソン競争と盆踊とを視察すれば誰しも盆踊を採るであらう、僕も盆踊に賛成する一人である。なぜマラソン競争を採らないかとならば、天香さんのいふ通りマラソンは何時も目的に達して居ない、走る事それ自身最後の勝利の手段である。決勝点につかなければ功力を生じないし、落ちつかれないのである。故にいつも不安と焦燥は免れない空虚である。我々はよし速くとも空虚な歩みはいやである。之に反して盆踊は何時も、目的に達して居る。踊る一舉手一投足が最後の勝利である手段はない。故に一足一足に安住して満足して居る。充足し充實

叶い、又現代的から見ても普遍的平等の大悲が味はれるではあるまいか。

(一七)之また貴師と全く同感です。覺位と云ふことを攝化の終局にのみ置くことは理窟としてはさもなく、己に眞言とか、天台とか禪宗などでも速達に覺位を得ることを得意とし、またそれを以つて殊に最勝の法として居る時代に於て、之を終局と云ふ言葉に改訂することばかりに永引くやうな氣もちがしていやな感じがする。又、大般涅槃に証入すること云ふことをそのまゝ、淨土に往生すること云ふ言葉と同じに解すれば必ずしも佛ならなくとも、入信の當體は己に涅槃に其の一步を踏み入れたことになるのであつて、それが直に佛子であり、諸佛と等しき覺位の一部を體驗することにもなるのである。それを必ずしもわざ／＼終局と改訂せられては何となく、他宗に對しても力落ちのするのを覺える。そしてまたそこには終局とすることによつて、他力の絶大が制限せられて、特殊となり、差別不平等の感じとなり、終局の更にいづ来るのやら甚だ前途が遠達となつて来るのです。速達頓教の頓中の頓が、いつの間にか漸中の漸となつた感じがして、一層私共を苦しめは

しないでせうか。

(一八)之に反して「人は皆」と云ふ方は如何に罪惡深重の「人々も」如來の大悲宏大なるを思ふ時、其の慈光の中に攝化せられし「人は皆」諸佛と等しい覺位を得て大般涅槃に証入することができるとの感じがして、如來の本願と一致して、他力本願の妙諦に接するの感がある。

(一九)そしてまた、そこにこそ宗教の救いもあり、生命もあるではないか。

(二〇)舊い昔の禮拜儀には貴師の云ふ通りヤハリ「終局には」さありました。それを私が初めて上人に會つた頃には「人は皆」と訂正せられてあつたのです。今度の改訂版と云ふのは上人滅後に發表になつたものであります。

(二一)而も、其の改訂の理由は「終局」の方が「人は皆」の方よりも、勝れてよいと云ふが爲めではありません。それはたゞ人が誤解し易いからと云ふので改正してくれさ他から頼まれた爲めの止むなき上人の改訂にすぎぬのであります。

して居る。我々の佛道修行も道理は全く一つである。終局に於て諸佛と等しき覺位を得るといふ側では佛道修行(我々にどつては念佛)が何時も目的に達して居ない、念佛修行それ自身が、終局の妙覺位を得る手段となる。マラソンに於て決勝点に着かなければ落ちつかれない様に、そして不安と焦燥と空虚とが感ぜられる様に、妙覺位に達せなければ満足は興へられないし、不安焦燥空虚の感はどうしても免れない。之に反して攝化せられし人は皆諸佛と等しき覺位を得るといふ側では、何時でも佛道修行が目的に達して居る。妙覺位(終局)を目的ともするが、そのまゝ、に又一念一念の念佛修行そのまゝ、が目的である。「一念に一度の往生はあておき給へる願なれば、念々毎に往生の業とはなるなり」一念一念が最後の勝利である。そして我々の生活は最後の勝利の連続である。盆踊が一舉手一投足に安住して、満足し充實して居る様に一念一念に安住し満足し充足して居るのである。(六)

又次の様な事も考へられる。「攝化せられし終局」にといふ側は因果異時の救となり、救いの特殊性となる。之れに反して「攝化せられし人は皆」の方は、因果同時の救となり、救いの普通性となる。前者は「終局」といふ事に限定せられた爲に普遍的の救いが限定せられ特殊化されてしまふ事になる。即ち「攝化せられし終局」に於てのみ救はあるといふ事になる。而して「終局」は果

して豫想出来るものか又どの程度を以て終局とするか、若しも五十二段の最後の妙覺の位に於てのみ覺位を得るといふならば、我々は絶望であらねばならぬ。妙覺を躰現するもの幾人かあり得やう。(七)

之に反して「攝化せられし人は皆」の方は、成佛(救)の普遍性を現はし、封建的宗教思想を打破して萬機普益てう人格平等主義の宗教となる。即ち「終局には」と「人は皆」とを比較してみる時、殊に「人」といふ字に人格中心をしのばせ「皆」に普遍性を思はせる特徴がある。此の意味からしても「人は皆」の方がい、様に思はれてなりません。(八)

斯く考へ來ると、故上人は何故に此の如き訂正を遊ばされたのであるか? 既に申し上げました様に私は今の一念一念の自己完成(成佛)が永遠の自己完成を信するものである。さらばと言つて今の一念一念に自己完成を信すればとて、それである禪宗坊さん見たいに我れ悟れりとして凝念とした顔して卒業した様な氣分力で力んで居るのでもなく、ある眞宗の信者の如く、一念皈命の當体に救はれたりとて後は御恩報謝の念佛だなど、ダラリとした生活をするものでもない。一念に一度の往生をあておき給へる願なれば念々刹々と御稱名裡に落ついて向上の一路を辿るのみである。(九)かく考へ來るとき故上人は何ぞ臨終近くになつてから封建宗教へ

の退轉的訂正をなされたのであるか、或は臨終に當りて惡魔が入り込んだのであるか、少くとも此の訂正は、故上人の實生活から見ても、あの寸隙の無駄なき御生活から見ても平素の御主張から見ても此の訂正は確に矛盾と言はなければならぬ。寧ろ信仰生活の發達史上から見ても、終局にはと最初ありしを人は皆と言ふ具合に訂正されてこそ進歩の跡が認めらるるものを、(五)何で「人は皆」を「終局には」と退轉的の訂正をなされたのであるか、充實生活を要求し、人格中心の普遍的成佛を期する私としては「終局には」にはどうも賛成申上ぐる事が出来ない。要するに故上人の訂正に屬するといふも、現在の宗教體驗から満足されないのを如何にせん、茲に上人私は此の退轉的の訂正及光明會の死活に關するが如き訂正が果して故上人の眞意から成されたものか、聊か疑なきを得ない点があるのであります。(三)

x x x x x x x x x x

觀道旅程

| | | |
|-----|--------|---------|
| 十月 | 日まで | 東京 |
| 十月 | 十二日より | 御殿場 |
| 十月 | 十八日まで | 焼津 |
| 十月 | 十九日 | 名古屋 |
| 十月 | 二十日より | 名古屋 |
| 十月 | 二十一日まで | 三河城寶寺 |
| 十月 | 二十二日より | 三河城寶寺 |
| 十月 | 二十七日まで | 三河城寶寺 |
| 十一月 | 十一月 | 清水、實相寺 |
| 十一月 | 五日 | 大垣、圓通寺 |
| 十一月 | 六日 | 岐阜、本誓寺 |
| 十一月 | 七日より | 神戶 |
| 十一月 | 九日 | 神戶 |
| 十一月 | 十一日 | 尼ヶ崎、圓平寺 |
| 十一月 | 十二日 | 大阪 |
| 十一月 | 十三日より | 大阪 |
| 十一月 | 十五日まで | 桑名、崇徳寺 |
| 十一月 | 十七日より | 桑名、崇徳寺 |
| 十一月 | 十九日まで | 桑名、崇徳寺 |
| 十一月 | 二十日より | 名古屋 |
| 十一月 | 二十一日まで | 名古屋 |
| 十一月 | 二十二日以後 | 北越地方 |

吾朋便り

▼新潟 佐藤宏様より

さて(唐澤)山に於きましては實に尊いお教へをお受けすることが出来、又御道友の方々の熱誠なる念佛のすがたを見せていた、きまじたことが生意氣な私には實に多大の刺戟となりました。生來私は大臆病者でした、事々に自分をより偉い者に見せようと勉めてゐました、それは言語、顔、姿、或ひはそれらの結合によつて千變万化をすることに焦心してゐたのでした、實に淺ましい自分であつたことに氣付かせていたといいた時は穴にもぐり度い感じでした。

私は不自由のない家庭に生長した關係もありませうがどうもブルヂョア氣取りのところが多分にあり

まして困つてゐたのですが近頃では大分それが薄らんだ様に感ぜられます、そして裸一貫で飽くまで力闘して見たい位ひに思はれる様になりました。この意氣を忘れず理想に對し、先づ當面の務めである學問に全精力を集注して遂ひにそれに到達す可く努力する決心であります。實際如何に些細な仕事にも全精力を擧げて之れが成就に努め得る人は尊い人であることに心に徹して解らせていたゞきました。何ものにも換へがたい尊い力を得させていただいたのでしたこの度の行は蓋し終生忘れ得ない思ひ出のお別時となること、思つて居ります。以後もたゞ一途に如來におすがり申して一路眞生の大理想に邁進せんものと深く念願致して居ります。

▼浦賀 石井文字様より
御上人様唐澤の御別時中には本當に有難う存じました、さう御上人様にはおつかれの事と存じております。
私はあんなにしんみりとした尊ひ清い皆様の集ひの中に入れさせて頂だいたのは生れてから始めてでございました。
本當に今までの自分のいたらなかつたのが一度に湧き出してまひりました、父母も非常に喜んで下さりました。
私さへよろしかつたら家族一同は御念佛の中に温かい御慈悲の中に暮らさして頂けますのに私の心中は今喜びが湧き出しております本當に御念佛を申してこのいたらない身を救つて頂かうと存じております。

御別時後汽車に乗りまして驛夫の聲も御念佛に聞へ走る音が木魚にきこへて實に何ともいへないよい感じが致しました、私は自分の使命を感じて希望の心がもへ立つて参りました。
歸りの富士川下りも面白うございました、大自然を眺めますとあの岩あの瀧如來様の御めぐみの深いことを感せずにはおられませんのでした。
▼舉母 吉田國三郎様より
今回の唐澤御別時三昧會は意外の多數にして昨年の七割を増し實に盛會の極に御座りました御上人様の御座敷迄で詰め込み殊に御休みの時は並通貳人寝の蚊帳に七八人意外にも我々と共に區別もなく毎夜混雜の中に御休みに相成實に恐縮の外無之何れの上人方の御座敷

を承るに如斯區別もなく追込の中に御休み等の事は是まで聞し事なく誠に無禮と云ふか何んと云ふか今回の如き恐縮に奉存候我々には幸にして上人様と同じ蚊帳の中に毎夜休ませて頂きた事は是れ唐澤別時の記念の一つと奉存候毎日御講話を承り毎々手帳に扣えおとに講話をかへし／＼見るが何よりの樂みに御座候私も本年七十歳と相成ました今回の御別時は青年方が八歩私共の様な老人はまづ今回の年長者らしく存ますどうかして明年も此様な盛會の中へ参加させて頂きたいと楽しんで居ります。
▼舉母 本多すね様より
御上人を初め道友の方々と共に親子でも兄弟でも出来ない様な無二の親しい生活をさせて頂たのも皆如來の御恵みと喜ばせて頂きま

す、そしてお慈悲深い御上人のお話を聞いて精神修養をした一週間は何んと貴いそして將來の幸福をはかる大切な一週間であつた事でございます。
御別時に集合した人々が皆御親切なお方ばかりで誰よりも僅の間に懐かしくなりました、其の時私の頭にふと浮び出しました、それはまあなんと如來の御力は偉い物である事よ、今迄の経験した中で一週間や、又常に一緒に居る人さへなか／＼あれ程迄も懐かしく感じた事のあつた事のないのになあ一全く人間は平等でなければ眞善の生活は出来ないと思ひました最後の別れの時の淋しさを今更つく／＼感じます。
併し考へて見ますに私が今迄は自分は何を行つても一番偉いと思つ

て居りましたが日一日と御上人の話が進むに従つてよくわかり、そして如來様が私をあの唐澤山へ手をとつてお連れ下さつたのだつたとしみ／＼感じました、又念佛の尊さを心から感じました。御上人様はほんとうにありがたうございました。
そして現在の青年が皆信仰に入つたならば今の様な我が國ではなくして生々とした生活の出来る、そして勢力のある國になるであらうと思ひました、そうではございませんでせうか?
お話によつて反省する事が足りないながらも私としてだけの反省の出来ました事に依つて深く／＼御上人に感謝致します。
そして自分の過去を反省して見るに何一つとして良い事があらう?

悪かつた、嗚呼悪かつた。違つて居た、人は皆兄弟だ、平等だ、ごうして分け隔てがあらう。そして將來は落附いた、そして生々とした生活をすべきである、殊に私達の様な者はこれからだ、現在の我が國家を如何にせんも現在の青年の今からのかたい覺悟、並びに美しい精神による物であると思ひます、もし私が母に進められずして唐澤山の御別時に仲間入をする一人でなかつたならば、こんな生々した覺悟は勿論持たせて貰ふ事も出来なかつたのであらうものを。

そして今迄通りの目覺めの生活を續けるのであつたらうと思ひますと私はつくづく母に對して心から感謝せずには居られませんでしたそれと共に又こうする事の出来た

のも全如來様の恩寵であつたのだそして私は出来ないながらも自分

富士山麓別時三昧會

- 一、時 昭和二年十月十二日晝ヨリ十八日朝マデ
- 一、處 東海道御殿場町 大乘寺ニ於テ
- 御殿場驛ヨリ自働車ニテ約十分
- 一、師 土屋觀道上人
- 一、申込 静岡縣清水市 清水實相寺

準備ノ都合上十月五日マデニ申込アリタシ

で出来るだけは念佛の日暮しをして唯々これからは信仰に深く入つて價值ある生活をすべきのみだぞ自覺致しました、御上人どうかこれからも願ひ致します。

| | | |
|---|---|---|
| × | × | × |
| × | × | × |
| × | × | × |

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓
振替口座東京四七二八八番 眞生社

東京市芝區芝公園第十四號地九番

編輯兼

土屋 觀道

名古屋市東區東外堀町二ノ二

印刷人

佐藤 忠義

東京市芝區芝公園第十四號地九番

發行所

眞

生

社

(大正十四年八月十三日)

昭和二年九月三十日印刷納本
第三種郵便物認可 昭和二年十月十二日發行

行 (毎月一回十二日發行) 第六卷第九號